

で私たちは生きていますので、それなしの日々を送るといことは本当に大きな生活の転換が要るわけですね。そういう転換をしていくこと、それで、転換したら、結構、健康な、楽しい、安全な、安心な生き方ができていくのだよということを、生きていच्छやる、先に行く仲間の生き方から学んでいくというのが、自助グループのとても大きな役割だろうと思うのですね。



私が家族教室を続けられたというのは、地域にそういうAAとか断酒会という自助グループがあったということが、大きな力でした。私は、そういう仕事をするに当たっても、いろいろな方に教を請いに行きましたけれども、一番学んだのは、ご本人たちからのお話でした。ああ、これがアルコール依存症の病なのかということグループの中で教えていただいて、そして、その人たちが暮らす日常生活の中、家庭ということのもう一つ大きな意味がある。家族が健康で暮らしていかなければ、病を抱えた人たちは、やはりアルコールに逃げたくなる。車の両輪のように両方が回復していく必要があるのだなということ強く感じました。

どうぞ、本人だけでなく、家族もアルコールを手放して、家族が飲むわけでは

ないのですけれども、アルコールの問題から少しずつ距離を置いていけるようになる生き方を一緒に考えていこうということをやってまいりました。

今日、このお話をするこういうお席に座らせていただくということで、夕べ、ASKという団体があるのですね。そのメルマガをチェックしてましたら、本当にここが重要なことだなと思ったのでちょっとお伝えしたいと思います。日常の中の飲酒運転ということに目を向きたい。飲酒運転というのは、通勤だったり、仕事だったり、そういう中で事故を起こしたりということがわっと取り上げられていきますけれども、実は、たくさん検挙をされている中で、ちょっとコンビニとか、ちょっとそこまでとか、そういうちょっとの運転も飲酒運転なのです。まるでつっかけを履いてコンビニに何か買いに行くということは、飲酒運転ではないような錯覚を皆さん持たれるのだなということ、改めてこのメルマガを見てわかりました。ああ、なるほどなと思いましたね。それほど飲酒という文化というか行為が日常生活の中に染み込んでいて、夕方からはほとんど酔っているみたいな生活をしていच्छやる方も結構あるかもしれない。それを普通のこととして受け入れられていたり、その普通の行為の中で、ちょっとコンビニに買いに行くというのは、もう車で行くということが日常になっている。それはだめなのだよということは、家族の中にもなかなか薄いのではないかと私は改めて、昨日、パソコンの画面を見ながら、そうよね、そういうことってあるよね、その行き帰りの中で、電柱に衝突したり、事

故を起こしたりして検挙されることもたくさんあるのだなと、すごく意識の中の落とし穴みたいなことを私は改めて教えられた思いがしています。本当に、飲んだら乗るな、飲むなら乗るなみたいな、「さあ運転するぞ」という時ではない、本当に毎日の生活の中に飲酒運転ということが、本当に身近に毎日あるのだなということをととても感じました。

お手元にあるプリントとは全然違う話をしてしまいましたけれども、今日、改めて樋口先生のお話やいろいろなお話を聴きながら、依存症ということを地域の皆さんが、これは病気なのだね、病気だったら助けてもらうことができる、どこかに相談することができるということをもまず知っていただきたい。もう恥ずかしいというような時代ではないと思うのですね。以前はアル中なんていう蔑称で呼ばれていた時代が長くありましたけれども、依存症なのです。本当に止まらなくなってしまう病気なので、「うちのは何だかおかしいよな」と思ったら、すぐに保健所だったりいろいろなところに、今は相談機関がたくさんあるので、どうぞ恐れなくて、恥ずかしくないで相談に行き、どうすればいいのか、治療はどういうふうを始められるのか、治療以外にどういう方法があるのか、そういうことを本当に地域全体で伝えていきたいなと思っています。

そういう地域の中の自覚というか理解とか、そういうことがあって、そして、私たちがお互いに子どもたちも守り、家族も安全に暮らし、本人も、昔のように本当にどん底で、底をつかないと治療には向かえないみたいなことではなくて、

まだまだ初期の段階のころから、きっと皆さんは、内科側の治療が最初だったと思うのですけれども、胃が悪かったり、肝臓が悪かったり、眠れなかったり、そういう時に行かれるお医者様のところで、まずアルコールの問題があるよねというチェックが入るようになったらいいのにといつも思っています。職を失ってから、どうにもならなくなってからというのは、本当に家族も子どもたちも心病んでいきます。そして、心病んでいったら、それは次世代に繋がってってしまう。そのことがとてもつらい悲しいことだと思っていますので、軽い段階に、どうぞご近所あるいは親戚、そういうところで、あれっと思ったら、気軽に声をかけてあげたりできる社会であつたらいいのになと思っています。

金光 ありがとうございます。ちょっと時間の関係で、もう一度またご発言いただきますので。

それでは、3番目は、広島電鉄株式会社のバスカンパニーバイスプレジデントで、日々ご苦労なさっていると伺っております田中さんの方から、どうぞよろしくお願いします。

田中 広島電鉄、田中でございます。日々苦労しているといわれると、非常に恥ずかしいのですが、先ほど樋口先生がお話しされたことについて弊社でやっていることを説明させていただきたいと思えます。

もともと広島電鉄は明治43年に創立した会社でございまして、その1年後の大正元年に広島市内で路面電車の運行を始めております。

今現在、大体187億円の売上と関連が21

社、連結で388億円を扱っております。

その中にバス部門がございます。バス部門は、昭和13年に創立しております。年間で2,278万キロぐらい走っております。日に直しますと6万2,000キロで、毎日地球1周半ほどしています。

こんな会社なのですが古くからバスを運行しておりますと、事故防止というのが非常に頭を痛める問題でございます。私ども、事故防止が非常に大切であり、創業以来、人の命という何事にも替えがたいものをお運びするという仕事をしている以上は、絶対に事故があってはならないと続けてやってきております。ただ、実際には、なかなか理想を追うというような状況になっております。

3. 事故防止への取り組み

(1) 運輸安全マネジメントの取り組み

- ・平成17年に多発したヒューマンエラーによる事故対策として創設されたもので、平成18年10月より開始。経営トップから現場までが一丸となり、「PDCAサイクル」による安全管理体制を構築し継続的取り組みを行うもの。
- ・輸送の安全に関する基本的な方針を「社是」に定めるとともに、「無事故の誓い」を唱和し、輸送の安全の確保が最も重要であるという意識を徹底。

現在、事故防止の対策として表に書いてありますように、運輸安全マネジメントというものがあります。これは、平成17年に非常に大きな事故が陸海空ともに多発しました。その事故原因を調べる中で、ヒューマンエラーが非常に影響しているということから始まったものでございます。

皆さんもよくご承知のJR福知山線の転覆衝突事故、これなどが代表的な事故の一つでございます。私どもは、このヒューマンエラーを含めさまざまな事故を

なくすための対策の中で安全確保の基本として、「社是」と「無事故の誓い」というものを、昭和30年代に創っております。あの当時は、道路状況が悪く、非常に大きな事故が全国的に多発したということもあったようですし、モータリゼーションのはしりの時代だったということで、創られたものです。

事故というのは、いろいろな条件が含まれて発生します。一般的によく言われる事故の原因は、人と車と道、この3点が原因と言われております。ここに(1)複数の要因と書いてありますが、③と④は人に関わるという意味で2つに分けて

4. 事故の原因

(1) 複数の要因

- ① 道路状況 (雨・雪・凍結、狭隘・見通しなど)
- ② 車両の不具合 (パンク・電球切れなど)
- ③ 運転技能 (未熟)

④ 健康(肉体的&精神的)

(2) 一度に複数の処理は出来にくい

- ① 認知
- ② 判断
- ③ 操作

おります。①は一般的に道路状況や形状あるいは積雪・凍結、また見通しが悪かったりなどです。②は、他にも、高速道路でエンジンが止まれば大きな事故に繋がりますし、もちろんハンドルが切れなかったりブレーキが利かないという問題があれば、間違いなく事故に繋がります。

③と④はそれだけでも問題ですが、①②と関連することで更に問題を大きくします。というのは、人は(2)の一度に複数の処理はできないからです。

誠に申し訳ございませんが、会場の皆様の一つ作業をしていただきたいと思います。両手の人指し指で両手ともに円を

描いてみてください。ひざの上でよろしゅうございますので。右指で右回りの円を、左指で左まわりの円を描いてみてください。できない人は多分珍しいと思いますが、もしできないようでしたら車の免許は持たれない方がよろしいかと思えます。

それでは、右手で右周りの円を、左手で四角を描いてみてください。今できた方は、是非とも当社に運転士としてお越しいただきたいと思えます。実は、複数の処理を一度にやるというのは難しいものでございます。因みに、右手に箸、左手にコップを持つ晩酌は、熟練で初めてできるようになるものです。車の運転も同じように熟練というものが必要でございます。

話がそれですみません。今の丸と四角を描くのが、作業としては、車の運転の場合は、認知、判断、操作ということになります。皆さんに丸を描いて下さい、四角を描いて下さいというお話をして、皆さんはわかったという認知をして、よし、指で描こうとして判断をして、操作をしたけれども、できなかったというようなものですね。これが、複数の作業を一度に行うことの難しいところなのですが、ここにお酒の勢いが入るともってできなくなっていくと。今日、右と左の円を描いたけれども、実は、それもできなくなるかもしれないというぐらい、お酒は影響するものだということでございます。

私どもは飲酒運転による事故を絶対にしてはならないというのが大原則でございます。事故を減らすために、事故原因の一つの飲酒運転は絶対あってはならな

いということでございます。

ここからが、私どもが、酒に関していろいろやってきた取組みでございます。飲酒運転で大きな事故といえば、平成11年に東名高速でトラックが一家4人の乗った車に追突、炎上し、幼児2人が焼死されたという大きな事故がありました。これが一般的に飲酒運転で大問題になった最初ではないかと私は思っております。その後、東海地方で平成14年に、高速バスの乗務員が、酒を飲みながら運転し事故が発生しております。接触事故程度で済み、運良く怪我をされた方はなかったのですが、こんな大問題なことがありました。この事から、人間である以上、どこの会社であつても同様のことが発生する可能性があるということで、それまでは精神訓示だけで、飲酒運転をするなどという指導だけやってきましたが、それだけではいけないということで、バス業界全体で前日のお酒の量や何時ごろまで飲んだか運行前に聞き取りをし、アルコール臭が無いか確認を始めました。

それでも、全国では飲酒運転の事案がなかなかなくなるならない、減少もしないということで、簡易型のアルコール測定器を導入しました。「0.15mg/ℓ 以上は乗務停止」で始めましたが、測定器が0.15ミリグラム以上でしか反応しないという今の測定器に比べお粗末な機械でございましたがそれでも人が酒気を判断するよりは確かでした。それと同時に、家族宛てに手紙を送りまして、是非ともご主人や子どもさんがお酒で人を殺めることのないように、また命を落とすことのないように家族の協力をお願いしました。

この一番下に常習飲酒者の家族面談と

5. 飲酒運転防止への取り組み (1) 今までの取り組み (第一期)

- ・簡易アルコール測定器を使用し、0.150mg/l 以上は乗務停止。
- ・未満の数値を検出した場合には、アルコール臭がなければ乗務可能。
- ・家族宛の飲酒運転防止協力要請の手紙
- ・常習飲酒者の家族面談(家庭訪問)

書いていますが、1年間に364日ほど酒を飲む乗務員のことでございます。あと1日の飲まない日は、明日は健康診断の日だから飲まないという乗務員でございます。決して多量に飲むわけではないのですが、酒を飲んで楽しむ酒の好きな者ですが、そういう乗務員には、その管理者が、乗務員と奥さんと3人で話をして、このままだと体を壊すよというような話をして、家族の協力をお願いしていることでございます。

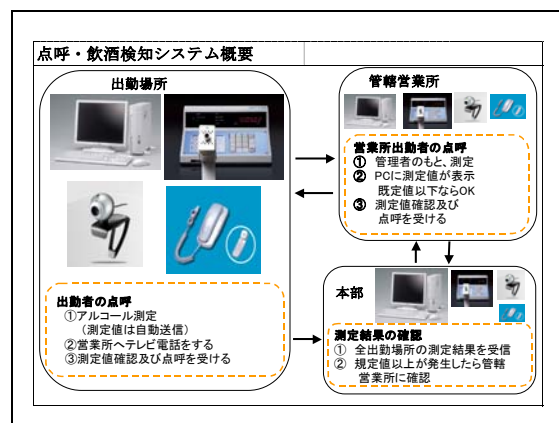
色々してきましたが、その期間も全国の子バス事業者で、毎年5件程度の飲酒運転事案が発生しております。その問題の一つが、検査漏れです。事業用自動車を持つ会社の場合は、朝、車を動かす前に、いろいろな点検や指示などをします。その中で、「アルコールのチェックをきちんとしなかった」とか、「酒臭い。代わりに(同僚が)わし(方言:自分)がやっちゃろう(方言:やってやろう)」といういい加減な検査をしてみたり、管理者が、「見なかった(方言:見なかった)ことにする」など、余りにもずさんな検査が何件ありました。

それから、もう一つ、0.15ミリグラム以上でないと反応しなかった機械も、もっと正確に微量でも測れる物を。それか

ら、アルコール濃度を測ったら、何月何日の何時何分に、〇〇さんがどんな状態で測定しましたという顔写真とともに測定記録をとるようにしようと。そして、確認は複数の人間で確認しようということにしました。

乗務停止の基準値の引き下げを0.05ミリグラムにしておりますが、これは機械の限界で、これ以下はあてにならないということで、測れる範囲の最小の数値を使っています。

それらを具体的に対策したものがこれです。高精度のアルコール測定器による



測定と、その測定結果を管理者と本部の2カ所に送るようにしました。それから、顔を見て点呼というのが本来の条件なのですが、なかなか顔を見て出来ないこともあります。それで、テレビ電話で顔や健康状態といったものを確認するようにしています。皆さんも貸切バスで宿泊旅行に行かれたことがあると思いますが、乗務員も、一緒に泊まった場合は、携帯型で、同じく顔写真、測定結果が送れるような装置を使うようにいたしました。

導入したのは平成17年で、これがシステムの概略でございます。図の左手の出勤場所と書いてある方が測定器具とテレビ電話です。右側の上の四角が管轄の